お得意の〝取引外交〟どんな中身？

トランプ初の海外出張はサウジ

海外レポート

国際ジャーナリスト 国木田 勝

現職米大統領初の聖地訪問

トランプ米大統領が就任後の初の外国訪問が中東サウジアラビアだった。去る5月20日、サウジの首都リヤドに到着、21日、同国など6カ国の湾岸協力会議（GCC）で首脳会議、イスラム圏50カ国以上の指導者を集めた会議を開き、過激派「イスラム国（IS）」掃討に向けた連携の強化を図った。

サウジを訪れたトランプ氏を迎えるサルマン国王（右端）（ホワイトハウス）

イランの脅威に直面するサウジを支援するため1100億ドル（約12兆円）相当の武器を輸出することで合意している。サウジは軍艦や米軍の最新鋭迎撃システム「高高度防衛ミサイル（THAAD）」などに関心を寄せており、今回の合意分を含め3000億ドル規模の武器輸入を目指すという。サルマン国王は、トランプ大統領が両国関係の発展に寄与したとして、サウジでの最高勲章を贈った。

5月22日にイスラエル、24日にはバチカンを訪れ、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教の中心地を回り、宗教を超えた連携をアピール。

25日にブリュッセルで欧州連合（EU）や、北大西洋条約機構（NATO）の首脳会らと会議を開き、26～27日にイタリア・タルオミーナで、先進国7カ国（G7）首脳会議（サミット）に出席した。

ロシアによる米大統領選干渉疑惑で特別検察官が任命されるなど、米国内で政権への風当たりが強まる一方なので、外交なで成果を挙げ、求心力を回復したい考えのようだ。

トランプ氏の初の外遊先となったサウジ。首都リヤドの幹線道路にはトランプ氏とサルマン国王の大量のポスターが掲げられ、安全保障上の米国との関係強化に対する期待が伝わって来る一方で、これまでの発言が「反イスラム的」としてトランプ氏への不信感を示す市民らも数多い。

確かにオバマ前大統領時代には、シリア内戦が激化してISがシリア、イラクで支配地域を拡大した。シリア市民の中には「世界に最も影響力がある米国との関係が深まれば、平和を志向するサウジの意向が中東地域に反映しやすくなる」と強調する声もあるが、トランプ氏に対する猜疑心はやはり強い。

「トランプはイスラムを憎んでいる」「イスラム圏からの入国禁止の大統領令を出している限り信用できない」「彼がイスラムを敵視していることは、神に抗う行為だ」――。

サウジの人口は約3000万人、内3分の1がイスラム圏などからの移民。2015年から隣国イエメンから逃れて来た人々も多く働く。

サウジの数万人の若者は米国に留学中だが、その中の26歳の青年は「トランプ氏はこれまで嘘ばかりついている。彼の言っていることが信用できるわけがない」と、冷めた見方をして見せる。

トランプ氏は、初の海外の旅先でも

不信感を抱かれていることは、米国内でも大きな反応をもたらし、大統領支持率も極端に低下、一部の与論調査では38％と最悪。今回の中東訪問も「政治の嵐からの逃避行」（ニューヨーク・タイムズ紙）と皮肉られている。大統領不在の間に政治の混乱が拡大する恐れあり、と見る識者が多い。

米紙のコラムでは「トランプ大統領は特異な行動、米国の安全保障や同盟国との関係、世界を危険に晒した。中東歴訪は直ちに止めるべきだ」と訴える声も高まっている。

しかし反面、トランプ氏がエルサレム旧市街にあるユダヤ教の聖地「嘆きの壁」を現職大統領として初めて訪問したことは、米国でも評価されている。

この時（22日午後）、敬虔なユダヤ教徒が使うキッパという丸帽子を被り、厳粛な表情で壁に手をついて祈りを捧げる。

初外遊でイスラム教、ユダヤ教、キリスト教の聖地がある各国を訪れることで「宗教を超えた連帯」を訴えたことは、特筆すべきではなかろうか。

中東和平の構築への好機をもたらしている。

言い換えれば同大統領の得意とする「取引外交」が世界注目を浴びたことになる。米国内では、支持率基盤の共和党内で好意的に評価する声が高まっているのも事実。

「嘆きの壁」に臨んだトランプ氏。独特の「キッパ」を被る（イスラエル首相府）

最高勲章を手にし「ニタリ」

去る5月22日、北朝鮮がまた弾道ミサイルを発射、約500㎞飛行して日本海に落下した。

英国は6月11日の総選挙でEU（欧州連合）離脱の交渉にメイ首相が乗り出す方針を固めている。

イランでは、22日の大統領選で再選された穏健派のロウハニ師がトランプ米大統領が中止への圧力を強めているミサイル発射実験について、防衛目的だと改めて強調、「技術的に必要な時はいつでも実施する」と今後も続ける姿勢を明確にしている。

フランスでは「政治刷新」を掲げるマクロン新大統領が、近く行なわれる国民議会総選挙で過半数に迫る勢いを誇示している。

こうして世界情勢を伺うと、やはり、米国主導の政治の動きが何よりも重大なのだが、その渦中にあるトランプ米大統領に、その意識があるやなしや、今後注目して行かざるを得ないだろう。サウジの最高勲章に浮かれることなく……。

20世紀後半以降の米大統領は、初の外遊先として、カナダやメキシコを訪れることが圧倒的に多かった、特に1980年代からは、まずはカナダ訪問が慣例になっていた。トランプ氏の中東訪問は初めてのケース。

これまでカナダやメキシコを訪れたのは、米国と国境を接する両国との関係を重視していたからだろう。トランプ氏の外交デビューの間隔もいまだ定かではないが、今後もあらゆる政治行動がトランプ氏の側近はもちろん、広く米国民にとってナゾ深きものになるのではないだろうか。

親から継いだ巨額の財産、それも大部分は不動産というから、〝取引外交〟〝取引遊説〟が優先してしまい、自由・民主主義の概念が米国主義、生き方から薄れてしまいそうな気配だ。

バチカンではフランシスコ法王と仲直り（？）の握手（ローマ法王庁）